

# らんの花

小川未明

青空文庫



（この話をした人は、べつに文章や、歌を作らないが、詩人でありました。）

支那人の出している小さい料理店へ、私は、たびたびいきました。その料理がうまかったためばかりではありません。また五目そばの量が多かったからでもありません。じつは、出してくれる支那茶の味が忘れられなかつたからです。支那茶の味がいいつてどんなによかつたらうか。まず、その店で飲むよりほかに、

私は、それと同じい茶を手に入れることができなかつたのです。

その味は、ちよつと言葉には現されないのですが、味というよりも香いがよかつたのです。なんとというか、まだ、江南の春を知らないけれど、この茶をすするときに、夢のような風景を恍惚として想像するのであります。

そして、頭の上の額には、支那の美人の絵が入っていましたが、美しい、なよやかな姿が、茶をすすする瞬間には、さながらものをいうように、真紅な唇の動くのを覚えました。

「君、このお茶の中には、香いのする花が入っているようだが。」と、ある日、私は、この店の主人に向かつて、ききました。

腰が低くて、愛想がよく、ここへ住むまでには、いろいろの

経験けいけんを有ゆうしたであらうと思おもわれる主人しゅじんは、笑わらつて、

「このお茶ちゃには、蘭亭らんていの白しろいらんの花はなが入はいつていますよ。」と、  
答こたえました。

「ははあ、らんの花はなが入はいつている。なるほど、それで、こんなに、  
やさしい、いい薫かおりがするのかな。」と、らんの花はなのもつ、不ふ思し  
議ぎな香かう気きに、まったく魂たましいを酔よわされたように感かんじたのでした。

偶ぐう然ぜんのことから、私わたしは、らんに興きよう味みをもつようになりまし  
た。いままでは無む関かん心しんにこれを見みていて、ただ普ふ通つうの草くさの一いっ種しゆ  
としか思おもわれなかつたのが、特とく別べつ、高こう貴きなもののように思おもいは  
じめたのです。そしてすこし注ちゆう意いすると、世せ間けんではいつからか、

らんが流<sup>りゆうこう</sup>行<sup>こう</sup>して、玩<sup>がんしやう</sup>賞<sup>しやう</sup>されているのに氣<sup>き</sup>づきました。デパートにもその陳<sup>ちん</sup>列<sup>れつ</sup>会<sup>かい</sup>があれば、と<sup>と</sup>きに公<sup>こう</sup>園<sup>えん</sup>にも開<sup>ひら</sup>かれるというふうで、私<sup>わたし</sup>は、いろ<sup>いろ</sup>の機<sup>き</sup>会<sup>かい</sup>に出<sup>で</sup>かけていつて、らんを<sup>を</sup>見<sup>み</sup>ることを得<sup>え</sup>ましたが、その種<sup>しゆるい</sup>類<sup>い</sup>の多<sup>おほ</sup>いにもまた驚<sup>おどろ</sup>かされたのです。たと<sup>たと</sup>えば南<sup>なん</sup>洋<sup>よう</sup>の蕃<sup>ばん</sup>地<sup>ち</sup>に産<sup>さん</sup>する、華<sup>かれい</sup>麗<sup>い</sup>なちようのような花<sup>はな</sup>をつけたもの、離<sup>はな</sup>れ島<sup>しま</sup>の波<sup>は</sup>浪<sup>ろう</sup>が寄<sup>よ</sup>せるがけの上<sup>うえ</sup>に、ぶらさがつてい<sup>い</sup>るとい<sup>い</sup>う葉<sup>は</sup>の短<sup>みじか</sup>いもの、また台<sup>たい</sup>湾<sup>わん</sup>あたりの高<sup>こう</sup>山<sup>ざん</sup>に自<sup>じ</sup>生<sup>せい</sup>するとい<sup>い</sup>う糸<sup>いと</sup>のよう<sup>よう</sup>に葉<sup>は</sup>の細<sup>ほそ</sup>いもの、もしくは、支<sup>し</sup>那<sup>な</sup>の奥<sup>おく</sup>地<sup>ち</sup>にあるとい<sup>い</sup>う、きわめて葉<sup>は</sup>の厚<sup>あつ</sup>くて広<sup>ひろ</sup>いもの、そして、九<sup>きゆう</sup>州<sup>しゅう</sup>の辺<sup>あた</sup>りから、四<sup>こくち</sup>国<sup>ほう</sup>地方<sup>やま</sup>の山<sup>やま</sup>には、葉<sup>は</sup>の長<sup>なが</sup>いものがありました。その中<sup>なか</sup>にも、変<sup>へん</sup>種<sup>しゆ</sup>があつて、葉<sup>は</sup>の色<sup>いろ</sup>の美<sup>うつく</sup>しい稀<sup>き</sup>品<sup>ひん</sup>があります。花<sup>はな</sup>もまた

いろいろで、一本の茎に、一つしか花の咲かないもの、一茎に群がって花の咲くもの、香気の高いもの、まったく香気のしないもの、その色にしても、紫色のもの、淡紅色のもの、黄色のもの、それらの色の混じり合ったもの、いろいろであります。しかし、まだ白い花を見なかつたのであります。これらのらんに、いずれも高価の札がついていました。

わたし  
私はこれを見ながら、

「このお茶には、蘭亭の白いらんの花が入っています。」といつた、この料理店の主人の言葉を思い出しました。白い花は、もっと珍しいものにちがいない。そして、もっと高価なものにち

がない。

「白い花があつたら、幾何するだろうか。」

こんなことも考えました。事実、金さえあれば、新高山の頂

にあつたというらんも、この手に入るのですが、ここで私の考え

たことは、自然の美というものが、はたして、金で買えるもので

あるかということでした。

これは、商人の場合ですが、こんな話があります。

どちらかといえ、私は、深くわかりもしないくせに、多趣味

のほうです。あるとき、街を歩いていて、骨董屋の前を通つて、

だれが描いたのか、静物の油絵がありました。立ち止まつて



それを見ているうちに、

「ちよつといいなあ。」と、いう気が起こつたのです。

もし高くなければ、買つてもいいというくらいに気持ちで、その店へ入りました。

「いらつしやいまし。」と、老人が丁寧<sup>ていねい</sup>に頭<sup>あたま</sup>を下げました。

私はその油絵<sup>あぶらえ</sup>の前に近く寄つて、じつと見ていました。

ちようど、このとき、一人の男<sup>ひとりおとこ</sup>が、飛び込んできて、

「どれ、その根掛<sup>ねが</sup>けというのは。」と、老人<sup>ろうじん</sup>に向かつて、手を差し出しました。たがいに顔なじみの間柄<sup>あいだがら</sup>である、商売<sup>しょうばい</sup>仲間<sup>なかま</sup>だとわかりました。

「これだね。」と、老人<sup>ろうじん</sup>は、そばにあつた小箱<sup>こばこ</sup>のひきだしから、

ぬのにつつ布に包んだ、青い石の根掛けを出して、男に渡しました。男は、だまつて熱心に見ていましたが、

「なるほど、いいひすいだなあ。」と、歎息をもらしました。  
わたしほうせきはなし私は宝石の話だけに、油絵から目を放して、そのほうに氣を取られていたのです。

「どうだい、その色合いは、たまらないだろうね。」と、老人は、さも喜ばしそうに笑いました。

「こんな、いい石があるものかなあ。」と、男が見とれていました。

「まったく、そうだ。」と、老人は、自慢らしく答えました。  
「いくらなら手放すかな。」

「いや、これは、楽しみに、持っていていようよ。」

「ふん、楽しみにか。」と、男は、冷笑うように、いいました。

「いいものは、どうも売り惜しみがしてね。」

「持っていて、どうなるもんでなし、もうかつたら、手放すもんだよ。」と、男は、

「さいわい、私には見せる口があるのだ。」と、男は、なか

「老人に、渡そうとしませんでした。老人は、なんといつ

ても笑っていて返事をしなかったので、男は、ついに、それを返

して、

「じゃ、また出直してこようか。」と、いつて、しまいました。

「なんとという深い青さでしょう。見てみると、玉の中から、雲が

わいてきます。どの玉もみごとです。波濤の起こる、海が映りま

す。いつたいこの美しい宝<sup>ほう</sup>石<sup>せき</sup>をば、自分<sup>じぶん</sup>の髪<sup>かみ</sup>の飾<sup>かざ</sup>りとしたのは、どんな女<sup>おんな</sup>かと空<sup>くう</sup>想<sup>そう</sup>されるのでした。

「いや、商<sup>しょう</sup>売<sup>ばい</sup>ですから、欲<sup>ほ</sup>しいものでも金<sup>かね</sup>になれば手<sup>て</sup>放<sup>はな</sup>しますが、生<sup>しょう</sup>涯<sup>がい</sup>二<sup>に</sup>度<sup>ど</sup>と手<sup>て</sup>に入<sup>はい</sup>らないと思<sup>おも</sup>うものがありますよ。そんなときは損<sup>そん</sup>得<sup>とく</sup>をはなれて、別<sup>わか</sup>れがさびしいものです。なかなか金<sup>かね</sup>というものが憎<sup>にく</sup>らしくなりますよ。」と、老<sup>ろう</sup>人<sup>じん</sup>は、初<sup>しよ</sup>対<sup>たい</sup>面<sup>めん</sup>の客<sup>きやく</sup>である、私<sup>わたし</sup>にすら、つくづくと心<sup>しん</sup>境<sup>きやう</sup>を物<sup>もの</sup>語<sup>がた</sup>ったのでした。この志<sup>こころざし</sup>があればこそ、骨<sup>こつ</sup>董<sup>とう</sup>屋<sup>や</sup>にもなつたであらうが、この老<sup>ろう</sup>人<sup>じん</sup>のいうごとく、美<sup>び</sup>というものは、まったく金<sup>かね</sup>には関<sup>かん</sup>係<sup>けい</sup>のない存<sup>そん</sup>在<sup>ざい</sup>であると思<sup>おも</sup>います。

話はすこし横道に入りしました。また、らんにもどりますが、

これは、らん屋で他の人が話をして聞いたのでした。

大資産家なら知らず、そうでないものが、一万円のらんを求

めるといふのは、よほどの好者ですね。それも全財産をただ

の一鉢のらんに換えたといふのですから、驚くじやありません

か。その人は、時計屋さんですが、金網の箱を造つて、その中

に、らんを入れておいたといふのです。白い葉に、白い花といふ、

珍品ですから無理ありません。ところが、時計屋さんは、仕

事も手につかず、毎日、らんの前にすわつて、腕を組んで、

「いいなあ、いいなあ。」といつては、考えていたといふが、と

うとう憂鬱病にかかつて、なにを思ったか、らんを引き抜い

て煎じて飲むと、自分で頸をくくつて、死んでしまったそうです。

「いや、その気持ちかわかる。」と、一人がいました。

私が、この話をきいているうちに、神さまにしかわからないも

のを人間が知ろうとして見つめていたら、だれでも気が狂うだ

ろうと思いました。

だが、あの宝石のもつ美しい色や、花のもついい香りという

ものは、神さまにだけ支配されるものでしょうか？ たしかに、

人間の心を喜ばせるものにちがいありません。しかし、それを

人間が所有することはできぬものでしょうか？ なぜなら、

人間が自然をすこしでも私しようとするときは、そこに、こう

した思わぬ悲劇が生まれるからです。

ちようど、春はる先さきのことでした。友人ゆうじんを訪たずねると、

「これは、故郷こくにから送おくつてきた、らんの花はなを漬つけたのだが、飲のでみないか。」と、湯ゆに入いれて出だしてくれました。

「らんの花はな？」

私わたしは、茶ちやわんの中なかをのぞくと、白しろいらんの花はながぱつと開ひらいて、  
忘わすれがたい薫かおりがしたのです。これを見みた、私わたしの胸むねはとどろきま  
した。

「君きみ、これは、どこのらんかね。」

「故郷こくにの山やまにあるらんだよ。そこは、南傾斜みなみけいしゃの深ふかい谷たにになつ  
ていて、らんの花はなのたくさんあるところだ。嶮けわしいから、めつた

に人がいれないが、春いくと、じつにいい香いがするそうだ。」

友だちは、らんについて、無関心のもののごとくただ故郷の

山の美しさを讚美して、きかせたのであります。

私がその山へ、友だちにも告げずに、らんを探しにいったのは、

すぐ後のことです。じつをいえば、矛盾と恥じますが、花の美

にあこがれるよりは、一万円に値するらんを探すためだったの

です。

山には、まだところどころに雪が残っていました。しかし五月

の半ばでしたから、木々のこずえは、生気がみなぎって光沢を

帯び、明るい感じがしました。谷には、雪があつて、わずかに底



ながながを流れる水の音がしたけれど、その音を聞くだけで、流れの姿は見えませんでした。そして雪の消えたがけには、ふきのとうが萌え、岩鏡の花が美しく咲いていました。とうげ峠に立つと山の奥にも山が重なり返っていました。それらの山まやま々は、まだ冬の眠りから醒めずにいます。この辺は終日人の影を見ないとこゝろでした。ただ、友を呼ぶ、うぐいすの声がありました。かわらひわが鳴いていました。まれに、やまばとの声がきこえてきます。

「ああ、いい薫りが……らんの香いだ！」

しろはな白い花の咲くらんのあるところへきたという喜びが、強く私をゆうき勇気づけました。しかしながら、このとき、しろくも白い雲が、谷を見下

ろしながらいききました。

「花は、神さまに見せるために咲いているのだ。花を愛するなら、

らんを取つてはいけない。」

わたし

私は、はつきりと雲の言葉を耳にきくことができました。けれど

わたし

私は、それに従わなかったのです。石から足を踏み外すと、

谷底へ墜落して、

左の手を折りました。この不具になった手

をごらんください。そして、いまでも、思い出しますが、そのと

きの雲の姿が

いかに神々しくて、光っていたか。人の思想も、

なにかに原因するものか、

以来、私は、地上の花よりは、大

空を

いく雲を愛するようになりました。





## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「未明童話 お話の木」竹村書房

1938（昭和13）年4月

初出：「真理」

1936（昭和11）年6月

※表題は底本では、「らんの花 《はな》」となっています。

※初出時の表題は「蘭の花」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年5月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# らの花

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>